日本内科学会学術集会.

内科学の展望（第16回）造血器腫瘍の治療 最近の進歩*

会長 福井医科大学第一内科 中村 徹

序 論

日本内科学会会頭（第86回） 内野治人

内科学の展望は、日本内科学会において、生涯教育の一環として企画され、既に16回を数えるに至った。血液学関係は第1回に行われたあと、2年前の高久史麿元会頭のもと前川正会長により「血液学の最前線」として前橋市で行われた。ここに今回はその一部として造血器腫瘍の治療をとりあげた。造血器腫瘍の治療の進歩は近年著しいものがあるが、一般にがん治療に対し、手術、放射線、化学療法の3大柱があり、そのうちの化学療法のみを主として、治癒と考えられる例も出てくることから、一般がん治療の治療理念を理解するために極めて重要と考えたからである。

癌治療の進歩

米国での疫学調査で、1950年から1982年までの癌対策の成果を評価した論文によって、全癌（主として肺癌、大腸癌、乳癌など）の死亡率は改善していないことが見出されて、癌対策のみなおしが提唱されている。しかし、その中にあって、造血器腫瘍、一癌としてはまれな疾患群になるが、このうち、一部は他の特殊な癌とともに治癒したと判定される症例があり、現在化学療法のみで治癒が期待される癌のうちで、造血器腫瘍が先陣をきいているといえよう。

造血器腫瘍の歴史

白血病、悪性リンパ腫の歴史は、100年しかないし、治療に関しても50年前には全くその治療方針がたてられていなかった。化学療法剤といわれるものの発見と応用は、1946年のnitrogen mustard, 1948年の抗葉酸剤に始まる。その後の薬剤の開発は著しいものがあるが、40年の歴史にすぎない。免疫療法、骨髄移植療法も1965～69年のフランスMaihéの試みが最初である。

造血器腫瘍のための病態 生理学的解明と診断の進歩

白血病、悪性リンパ腫の治療の進歩の裏づけとして、病態生理の解明があげられる。すなわち、造血幹細胞の試験管内培養の成功とそれに及ぼす造血因子の知見の進歩であり、またmonoclonal抗体を始めとする各種物質による血球表面の形質の同定により、細胞のlineage, clonalityの検索が容易となったことがあげられる。この上に、染色体分析の成果と分子遺伝学の技術の導入により、遺伝子, oncogeneの局在, 証明が、病型の表現形質のみならず、遺伝形質も明らかにされるに至った。臨床的には、現実的な急性白血病分類としてのFAB(French-American-British)分類とその訂正追加、そこから派生したmyelodysplastic syn-

* 本講演は、1988年10月16日、福井市田原1-13-6、フェニックスプラザにて行われた。

Review on Internal Medicine (1988) Recent Progress in Treatment of Hematological Malignancies
President of the Scientific Session: Toru NAKAMURA, The First Department of Internal Medicine.

Fukui Medical School, Fukui

Introductory remarks, Haruto UCHINO, President of the Japanese Society of Internal Medicine (1988)

drome, 悪性リンパ腫の再分類として国際およびわが国でのlymphoma study group (LSG) 分類の提唱, 慢性型白血病のstaging, 自然史の解明, 新病型の発見と再認識として成人T細胞白血病(ATL), 巨核芽球性白血病(FAB分類でのM7の追加), 悪性リンパ腫の中のangioimmunoblastic lymphadenopathy (AILD), immunoblastic (IBL)-like T cellリンパ腫など, 疾患の経過, 予後との関連で重要な治見を提供してきた。

造血器腫瘍の治療の進歩

以上の様な病態解明, 診断の進歩に基づいて臨床的に治療法が進歩して効果をあげつつあり, そこには, 抗白血病薬の用法, 用量の工夫があり,

支技療法としての抗生物質として抗細菌物質のみならず, 抗ウイルス, 抗真菌剤の普及と輸血の合目的使用があり, 骨髄移植への基礎が打ちたてられてきた。過去から現在, 将来に向けて, 免疫療法としてのBRMへの反省, 分化誘導療法, サイトカインの応用, 薬物耐性(治療抵抗性)への対策など期待のもたれる治療法が進展しつつある。

おわりに

本日の内科学の展望において, ここにのべてきた各項目についてのわが国の先端に行く血液学者からの現時点での総括をきいて戴くことは, 癌治療への今後のあり方を理解してもらう上に, 極めて有効であると信ずるものである。